



写真-1 バターシー発電所

ロンドン・バターシー 発電所

London Battersea Power Station

蘇ったRC造のランドマーク

近畿大学 理工学部社会環境工学科教授 岡田 昌彰

1. ロンドンの新たな展望台

世界屈指の歴史・文化都市、ロンドン。華やかなセント・ポール大聖堂をはじめ、ビッグ・ベンやタワー・ブリッジなど歴史的なアイコンの間に、ロンドン・アイ、ザ・シャードなど21世紀の新たなランドマークが屹立する。歴史と現代が奏でるこの見事なシンフォニーは世界中の訪問者たちを長く魅了し続けてきた。

中でも特に異彩を放つのは、3棟の巨大な歴史的発電所ではないだろうか。ロンドン地下鉄用に完成したロッツロード発電所(1905年)、2000年よりテート・モダン美術館として利活用されているバンクサイド発電所(1891年)、そして近年その大規模な再開発が注目されているバターシー発電所(写真-1)である。

写真-1の右手前(北西)にある煙突の頂部をよく見ると、円筒形ガラス張りの上屋が人影とともに確認できる。「リフト

109」と名付けられたこのユニークな展望台からは、テムズ川沿いに広がる大都会ロンドンの姿が一望できるのだ(写真-2)。煙突の帯びるアールデコの端正なディテールを間近に観察することもできる。ガラスエレベーターで煙突内を上昇し頂上に辿り着くや否や、この壮大なパノラマが忽然と目に飛び込み、展望室内は訪問客の大歓声で満たされるのだ。

2. ロンドンのランドマーク：工業の大聖堂

琥珀色の4本煙突がなす、特徴的なシルエット。かつて東京にも隅田川沿いに千住火力発電所の4本煙突が存在し「おばけ煙突」の愛称で親しまれていたが、廃止翌年の1964年には早々に解体されてしまった。バターシー発電所も高効率発電所の台頭により1983年に廃止され解体論も浮上していたが、歴史的

建造物や遺跡を保護・管理する組織EH(イングリッシュ・ヘリテージ)は先手を打っていた。発電所はすでに重要な産業遺産として認識されており、1980年にグレードII文化財に登録されたのだ。この「存続の保証」は、45年の時空を超えて現在のロンドンたちにも大きな恩恵をもたらし続けている。

建設工事は1929年に始まり、1933年の発電開始後も逐次増築されていく。建設計画の発表当初は環境・景観面で反対意見も根強く、カンタベリー大主教ほか王立英国建築協会の総裁と前総裁までもが反対派に加わり、建設そのものが危ぶまれるような状況にあった。

このような厳しい情勢の下、建設側は世界初となるガス洗浄プラント導入など最新鋭の環境対策を講じたのに加え、景観面においても最善策を取った。名だたる建築家ジャイルズ・ギルバート・スコット

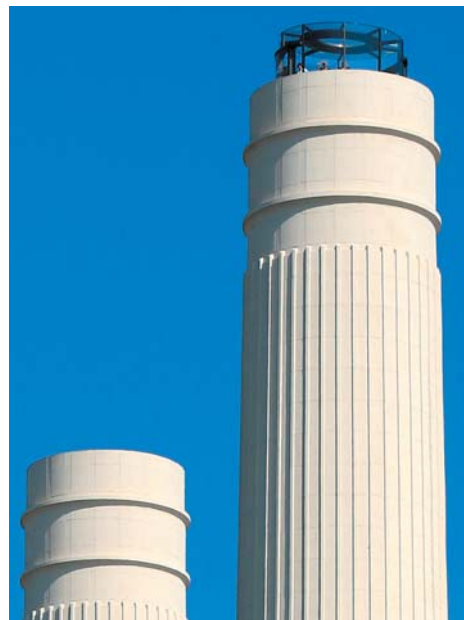


写真-2 煙突頂部の「リフト109」展望台(左)とパノラマ



写真-3 バターシー発電所(左)とワンズワース区のサイン(1997年撮影)



卿(1880-1960)にその設計を依頼したのだ。彼は期待通りに敏腕を振るい、この設計で建築賞を獲得、発電所は「工業の大聖堂」の名を冠するに至った。全盛期にはロンドン市内の電力の1/5を供給したほか、1949年にはエリザベス女王も見学を訪れている。1977年には伝説のロックバンド、ピンク・フロイドのアルバム“Animals”のカバーアートにも描かれ話題となった。その優美な姿はロンドンの絵葉書はもちろん、古くはヒッチコックの“Sabotage”(1936年)、戦後はビートルズ主演の“Help!”(1965年)、モンティ・パイソンの“The Meaning of Life”

(1983年)などの映画やファッションデザインのモチーフとしても頻出している。2014年には日本の海外旅行誌『地球の歩き方 ロンドン』の表紙も飾った。同発電所はロンドン各所に個性的な表情を放ち、文字通りロンドンの顔の1つにまで昇華したのだ。

筆者が初めて訪れた1997年当時も強烈な存在感を放っており、現地ワンズワース区のサインにはそのシルエットも確認できた(写真-3)。また、再開

発直前の2012年当時、1kmも離れたエバリー橋からテムズ川越しにレールの曲線群とともに特徴的な景観を捉えることができた(写真-4)。



写真-4 エバリー橋から捉えたバターシー発電所(2012年撮影)

3. 再開発にいたるまでの紆余曲折

だが発電所はこの後、波乱万丈の生涯を辿ることとなる。1980年代後半、サッチャー首相の支持も得ていたテーマパーク計画は経済不況などの影響で中止。その後もイギリス国内のみならず香港やマレーシア、アイルランドなど外資企業による買収・売却が続き、その都度娯楽施設や住宅、バイオ発電所化など幾多の計画が現れるも頓挫を繰り返していく。まさに、百家争鳴。当初は2009年とされた完成予定年も再三延期され、地元ロンドナーたちを辟易とさせた。2012年、このカオスようやく終止符が打たれ、住宅、ショップ、カフェ、レストランを含む文化複合施設の建設工事が始まった。

4. RC煙突の再建と発電所の転用

ロンドナーたちの最大の関心事はやはり4本煙突だった。2005年、EHはコンクリート修復の専門家と協働で煙突の劣化状態を大々的に調査し、鉄筋の腐食が極めて危機的な状態にあると指摘する。煙突はもはや修復不能であり「再建」が必要だった。これに対し市民グループは反論するも、オリジナル図面をもととする「精緻なレプリカ」の再建が決定した。

2014年からは各煙突の解体作業とともに、のべ25,000台の手押し車分のコンクリートを手作業で打設するという気の

遠くなるような工程が始まった。配筋やコンクリートの組成には若干変更を加え長寿命化が図られた。さらに、各煙突の諸元と詳細な装飾の形状を3次元で計測し、再建煙突の形態に精緻に反映させた。この工程には数カ月を要したもののその優れた成果が認められ、これを担当したボロ・ハップOLD社は英国建設エクセレンス賞を受賞している。

欧州最大級の煉瓦構造物である発電所本体は600万個もの煉瓦と補強鉄骨フレームで構築されていた。うち損傷が見られた175万個分は、当初建設を担当した2社によってこれも手作業で新造され

た。既存の素材を極限まで再利用する、ロンドン史上最も挑戦的なプロジェクトであったという。

一方、巨大なタービンを格納していたタービンホールA(写真-5)は、鍛鉄製の階段とともに壮麗なアールデコの装飾をもつイタリア産大理石造の列柱が特徴的であり、さらにガラス張りの壁面からは外光が差し込みホールのスケール感が強調されている。一方、1950年代に完成したタービンホールBは、対照的に装飾を極力排したモダニズムの内装をもつ(写真-6)。その2階部分に張り出す旧操作室はカクテルバーとして利用されて

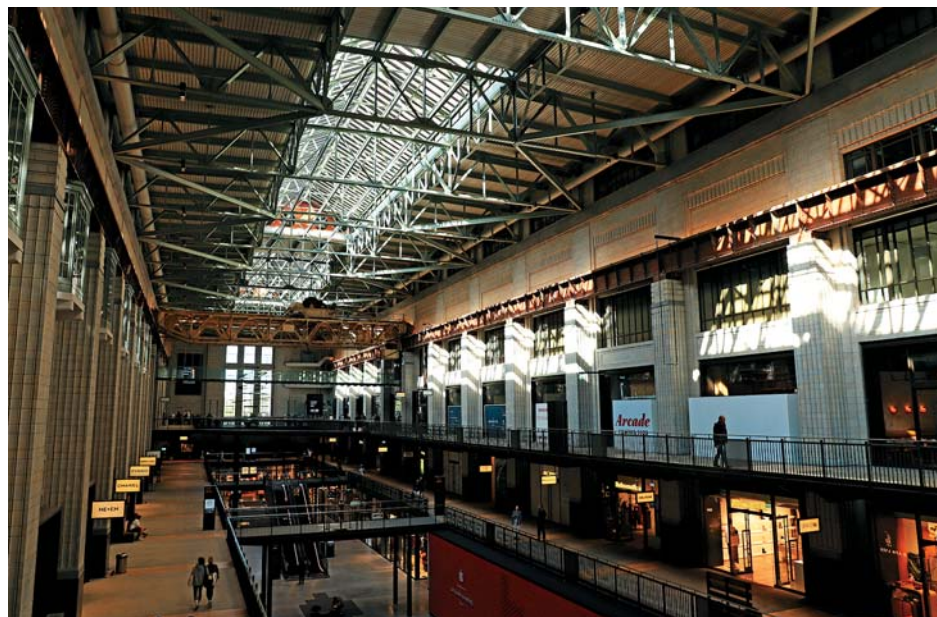


写真-5 タービンホールA

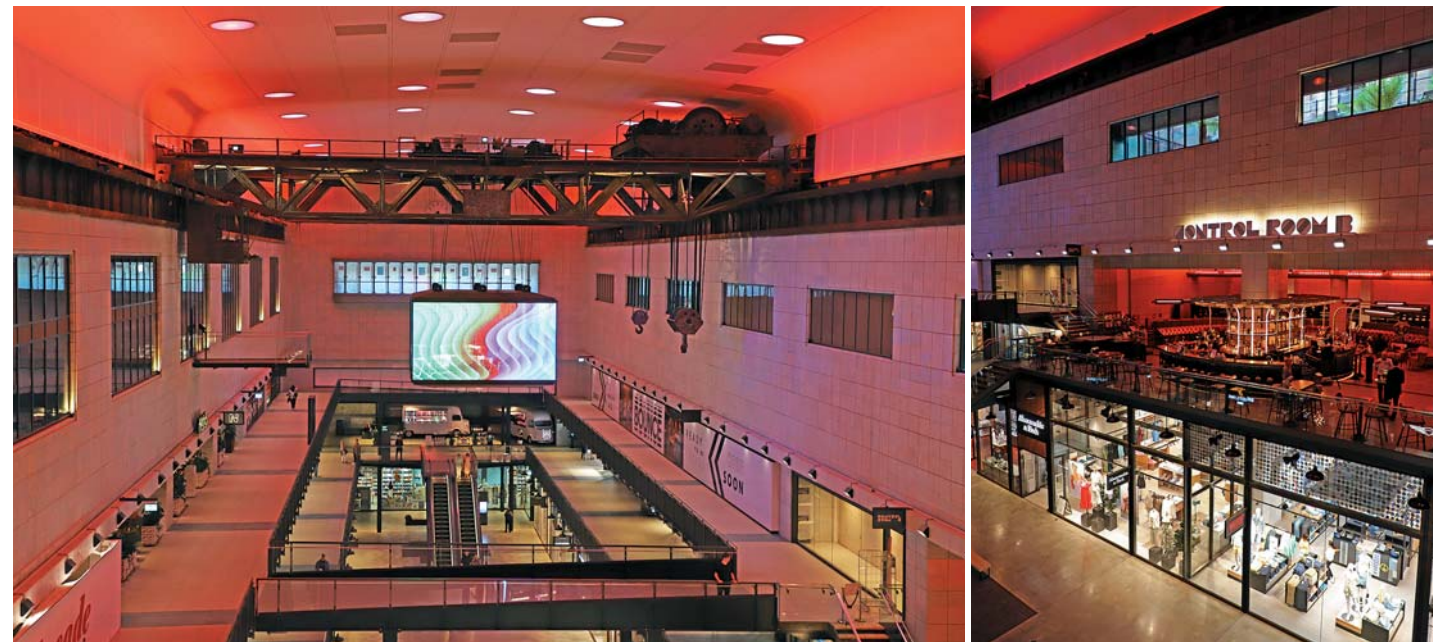


写真-6 タービンホールB(左)とカクテルバー



写真-7 重厚なファサード(左)と、それとは対照的なアトリウム(右)

いる。いずれのホールにも天井クレーンとレールが工業のアイコンとして保存されているほか、機械の設置されていた床面には煉瓦が敷かれ、工業用途の足跡が残されている。

また、発電所の南北入口にある大きなアトリウム(吹き抜け空間)も印象的だ(写真-7)。巨大な幾何学的フォルムからなる外観の重厚かつ整然としたファサードとは対照的に、その内側にある軽快なアトリウム空間には古い階段の遺構や洗面所タイルの一部、鋼鉄の梁などが露出している。静と動の醸し出すこのギャップの面白さは、ストイックな工業的外観と内部の賑やかな商業施設とが織り成すコントラストにも呼応しているようだ。

5. ランドマークは維持されたか

2021年にはロンドン地下鉄ノーザンラインが当地まで延伸され、バタシー発電所駅が新たに開業、アクセスは格段に改善された。発電所は2022年から公開されているが、2023年、2024年の訪問時いずれも多くのお客様で賑わいを見せていた。2024年のクリスマスには建築や産業遺産に造詣の深いチャールズ国王が訪れ大きな話題となった。開業からわずか2年足らずで、すでにロンドンの新名所として定着しているようだ。

実際、プロジェクトには課題も多い。屋上テラスと庭園に囲まれた豪華な住宅が発電所の東西に新たに建設され、結果的に発電所の外観を著しく遮ることとなってしまった。4本煙突の全体像を捉えられる視点場はもはやテムズ川対岸に限られてしまい、写真-3、4のような絶景は今や遠い過去のものとなったのだ。実際、地元ではこの現状を問題視する意見も少なくない。ランドマークの有効利用の成功と引き換えに、肝心のランドマークそのものが弱体化するのでは本末転倒ではないだろうか。産業景観のもつ本質的価値について、さらなる議論が必要であろう。

※掲載写真は全て筆者撮影

【参考文献】

- 岡田昌彰著『美しい英国の産業景観(テクノスケープ)』、創元社、2018
- 岡田昌彰著『テクノスケープ: 同化と異化の景観論』、鹿島出版会、2003
- Geoff Marshall: London's Industrial Heritage, The History Press, 2013
- BBC News: 7 December 1997, 6 August 1999, 1 September 2000, 16 July 2005, 13 October 2005, 5 September 2012, 23 October 2013, 14 October 2022, 13 December 2024
- Battersea Power Station Website: <https://batterseapowerstation.co.uk/>
- Buro Happold Website: <https://www.burohappold.com/>
- ※ウェブサイトは全て2025年2月現在



おかだ・まさあき

【著者略歴】

1991年東京工業大学土木工学科卒業、1996年同大学院博士後期課程修了。株式会社長六、国土交通省国土技術政策総合研究所研究員、東京大学研究員等を経て、2003年近畿大学講師、2013年より現職。英国ケンブリッジ大学客員研究員。イギリス産業考古学会特別賞、日本都市計画学会石川奨励賞、日本観光研究学会観光著作賞、日本造園学会賞、日本造園学会研究奨励賞を受賞。著書に『美しい英国の産業景観(テクノスケープ)』(創元社、2018年)、『日本の磁都一石灰石が生んだ産業景観(テクノスケープ)』(創元社、2017年)、『テクノスケープ 同化と異化の景観論』(鹿島出版会、2003年)など。主な研究テーマ: 土木遺産・産業遺産を対象としたヘリテージ・スタディ、テクノスケープ研究、土木史研究など